

全集
現代世界文学の
発見 3

スペイン人民戦争



全集・現代世界文学の発見 3

スペイン人民戦争

長田 弘 編

學藝書林版

全集・現代世界文学の発見 3 ス페인人民戦争

発行者 田寺正敬

印刷者 和田彰三

発行所 株式会社學藝書林

東京都中央区八丁堀二の三の五

〒番号 一〇四 振替東京 一〇八二一

印刷・製本 東洋印刷

昭和四十五年二月二十八日第一刷発行 ©

八八〇円

目 次

スペインの叫喚

エレンブルグ

中里迪弥訳

5

自由をテーマに

ドス・パソス

中理子訳

139

スペイン戦争の戦友への手紙

ヘミングウェイ

松本唯史訳

175

スペイン・一九三八年

ロベール・ブラジャック

高橋治男訳

185

秋の日記

ルイス・マクニース

中桐雅夫訳

207

スペインは世界の作家を招く

スペンダー

長田弘訳

269

同志ビラ／ブルネーテ／伝説の時代

ラルフ・ペイツ

鈴木建三訳

279

ナバラ

C・D・ルイス

小田島雄志訳

321

ガルシーア・ロルカ論

ロイ・キャンベル

桑名一博訳

331

解説 スペイン戦争の芸術家たち——索引の試み——

長田弘

385

監修

野間 宏

堀田 善衛

長谷川 四郎

佐々木 基一

編集

長田 弘

協力

「文学者」

南雲 堂

装本

原 弘

イリヤ・エレンブルグ「スペインの叫喚」(中里迪弥訳)

イリヤ・グリゴリエヴィチ・エレンブルグ(一八九一—)ソヴィエトの作家。キエフのユダヤ人中流家庭に生まれ、少年時代をモスクワで送った。一五歳のときにボリシエヴィキの組織にはいって地下活動を始め、一七歳で逮捕投獄、一八歳でバリに亡命、唯美派詩人として処女詩集詩編を発表、ボヘミアン芸術家群れに投じ、同時に政治亡命者たちとも交り、作家としても人間としても成長した。九年間のパリ生活の後、革命勃発とともに帰国、のち新聞の通信員等をやりながら作品を書く。『フリオ・フレニトの奇妙な遍歴』『トラスティ・D・E・ヨーロッパ滅亡史』『第二の日』『息もつかずに』を発表。三六年にスペイン戦争に参加。人民戦線の成立からその没落、第二次大戦の勃発、パリ陥落までを描いた『パリ陥落』で作家の地位を確立。のち『嵐』『第九の波』『人間・歳月・生活』等を書く。

Ⅱ 作品解題

『スペインの叫喚』について

(原題「人間には何がいるか」)

エレンブルグの文学は、普通『フリオ・フレニト』及び『トラストDE』の時期を前期、『第二の日』及び『息もつかずに』を中期、『パリ陥落』、『嵐』及び『第九の波』を後期というふうに分けて考えられているが、この分類に従えば、さしずめここに訳出した『スペインの叫喚』(原題「人間には何がいるか」)は、いわゆる後期の戦争三部作における、一種のプロローグとしての役割をはたしており、『パリ陥落』が現われてくる必然性もこの中にあるのではないかと思われる。

この小説は、第二次大戦の前哨戦と目されたスペイン市民戦争の最中、一九三七年九月に、その当初からジャーナリストとして戦場を駆けまわっていた著者エレンブルグが、一時戦列を離れ、南フランスのロット河畔の一寒村で休養していた際のごく短い期間に書きあげられ、同年十一月号の『十月革命二十周年記念号』と銘うたれた政治・文芸雑誌『旗』(ズナーミヤ)に発表されたものである。

スペイン内戦をテーマにした文学作品の中で最も人口に膾

炙されているものは、なんといってもマルローの『希望』(一九三七年十二月)であり、ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』(一九四〇年十月)であろう。彼らの作品は、両者の文学的系譜の中においても、二十世紀前半の文学的達成という点においても、モニュメンタルな価値を持っていることは疑いない。

しかし、このエレンブルグの『スペインの叫喚』は、上記欧米側二作より早く発表されたにもかかわらず、わが国には、いまだ紹介されておらず、従って、この翻訳により、米・仏・ソの作家たちによる、いわば「文学的スペイン市民戦三重奏」として、はじめて並列的に提示されたことになる。この国際的小説コンクールのいずれに軍配をあげるかは賢明なる読者諸賢の自由な判断に任せたい。

ただ、しかし、次の点は特に強調しておきたい。すなわちこの三作家とも、スペインの地Ⅱ戦場にあつては、共和政府側にたち、或はパイロットとして、或は従軍記者として死の危険にさらされていたという共通点を持っていたわけだが、欧米側の二者は、一度戦列から離れば、おそらく自国の体制の側からの生命に対する脅威、まして執筆に対する拘束など考え得べくもなかったろう。だが、エレンブルグの場合、先の二者とは決定的に異なっていた。当時のソヴェートでは、例の「個人拝跪」という自虐的ともいふべき政治病理

がさらに悪化し、政治的・軍事的領袖たちや文学・芸術分野における革新者たちがあいついで肅清されてゆくという血なまぐさい嵐が吹き荒れていた。この時エレンブルグは国外にいた。彼は《うまくやっている》と見なされ、最も毀誉褒貶のはなはだしい作家というレッテル（彼の文学の評価にかかわる問題の一面もここに由来するのではないか）がはられた。だが、国外にあったとしても、エレンブルグは、死の谷間を彷徨するような思いをしていたにちがいない。実際、当時のソヴェートにあって、一介の文弱の徒の生殺与奪など、国内にいがうが、国外にいがうが、問題ではなかったのだ。例のトロツキーの場合を見ても、それは容易に想像がつくであろう。文学は冷酷な時間の審判を受けるものであり、その間にいかなる弁解の余地がないにしても、要は、エレンブルグが、本編を書くにあたって、西欧側の二作家と比較にならぬほどのハンデを背負っていたという事実を述べておきたかったのである。

なお、この作品は、荒っぽい即物的な短い会話、場面転換の早い映画的な構成が特徴となっている。

（テキストは国立文学・芸術出版所版エレンブルグ五巻選集第四卷（一九五三年）を使用し、雑誌『旗』（一九三七年十一月号）を参考にした。）

中里迪弥 記

スペインの叫喚

——人間には何がいるか——

1 ファシストの町で

めっかちのヘスウスは、パン屋の家から、まだ、射ちかえしていた。ファランへ党員たちは、わらに火をつけた。鼻をつくような煙が、小窓へはいりこんでいった。

しばらくして、死んだヘスウスが、広場へひきずりだされた。彼は、血ばしった大きな片眼で白ずんだ空をながめていた。さびた環にくくりつけられたらばどもは、不安げにわめきたてていた。

ファランへ党書記ヴァスケスはビールを飲んでいた。クリットがかけよってきた。

「マノロはレリダにいる！」

ヴァスケスは、「くだらねえ」と答え、オリーヴのたねを机の上に、はきだした。ひどい暑さで、彼は息がつまりそう

だった。カラーがべとついて、まるで細引のように、彼の首をしめつけていたからだ。

鐘楼守が鐘をならした。派手に着かざった聖母が、教会からでてきた。彼女は、生気のない唇に、意地悪い笑いを浮かべていた。ヴァスケスは、彼女のビロードの引裾を捧持し、歩きながら歌っていた。

《希望のぞみいし万民の希望……》

去勢された人間の持つ、甲高い声だった。

バルコニーにロベス大佐があらわれた。彼は海老えびのようにとびでた眼を持った、でつぶりとふとつたアンダルシア人だった。彼は、帽子の底に手をやり、途方にくれたような笑いをした。今朝がた、ファランへ党員たちが《人民の家》を包囲していた時、ロベスは、懷炉かまどを腹にあてがったまま、床の中にいて、小声で、「まずいことになった！」といっているからだ。

ヴァスケスは、若造のような将校の顔に、ナフタリンくさい聖母の引裾をなげつけておいて、自分はバルコニーに走りよった。

「閣下、簡単な祝辞を！」

ロベスは、ぱっと顔を赤らめた。すると、彼の両眼は、さらに鮮明に顔からはなれた。彼はがなりたてた。

「スペイン人たちよ！ まえへ！」

ヴァスケスの細君は、ヘスウスの死体を見ると、レースの扇をあおぎだした。

「なぜ片付けておかなかったの？」

大尉は、気をきかして、ヘスウスの顔に、粉袋をかけた。ヴァスケスは、楽隊用のあずまやに、やつと登りついた。

彼は、その治下では、決して太陽がしずむことはなかったカ
ルロス帝国に思いをはせていた。そして、ぎょうぎょうしい
文句をならべたてながら、あつぽったい唇を動かしていた。
すると、また、クリットがかけよってきた。

「ちよつとやつらを調べてみるかい？」

逮捕された人々は、徒弟学校の庭に追いこまれていて、フ
アランへ黨員たちのために、銃剣でこづかれていた。

ヴァスケスは、いきなり質問した。

「カラスコは、どこだ？」

製本工のカラスコは、アカの指導者と見なされていたのだ
った。

クリットは、両手を左右にひろげた。

「ずらかったよ。かわりにつかまえたのが、やつの倅さ」

製本工の息子は、十四歳だった。つきでた、大きな耳、イ
ンクだらけの指。

ヴァスケスは、彼にレヴォルヴァーをつきつけた。

「どこだ？」

少年は口をつぐんでいた。

「きさまのおやじがどこにいるのか、きいているんだ！ 淫
売のがきめ！」

少年は、かすかに眉をあげ、平然として答えた。

「射ちやがれ！」

銃声がとどろいた。いまやクリットはヴァスケスをせきた
てている。

「まずいぞ。ロベスが待ってるから……」

ファランへ黨員たちは、夜中まで、さわぎまわっていた。
ラッパ吹きたちは、『皇帝行進曲』を奏し、僧侶たちは、ほ
こりだらけのトラックに、聖水をそそぎ、人ごみにもまれた
ロベス大佐は、ちつぽけなハンカチで、汗でべとついた大き
な顔をぬぐっていた。

その後、すべては、しずまりかえった。ファランへ黨員が
一人、まだ冷えきらないほこりの中に顔をつつこんだまま、
死んだヘスウスと並んで、いびきをかいていた。

月がいわし雲におおわれた。猫どもが、青眼をきらつかせ
ながらけだるそうにうなっていた。

夜明け直前、一発の銃声がなりひびいた。ロベスは、眠く
て着替えなくなかった。彼は細君にせきたてられた。彼は大
げさな溜息をつきながら軍服のボタンをかけちがえだした。

若い中尉は、「スペインのために！　スペインのために！」と繰り返していった。

女が泣きじゃくっていた。

ヴァスケスは、荒地を走りながら、がなった。

「こりゃあ、マノロだ！」

《家具運搬》車、機関銃を背負ったろばたち、バルセロナのタクシー、リムジン車、がたのきた荷馬車。それらは、町から二キロのところで、停止した。トラックは、敷きぶとんでおおわれていた。弾薬、ぶどう酒のはいつている皮袋、ギターなどなど。

マノロの自動車には、《ウエスカへ！》と書かれてあった。

「機関銃をすえつけろ！」

「自分でやれっ！」

誰かがさげんだ。

「マノロをからかうんじゃないぞ！　彼は委員会の人間だから」

「じゃあ、なにか？　おれが委員会の者じゃねえっていうのか？」

かかとの高い靴をはいた娘たちが、不器用に岩場をよじのぼってゆく。彼女たちは重い小銃をやっとひきずっている。

後方はもうもうたる砂塵。金属工たち、兵士たち、サバデル地方の織物女工たち、会計係たち、闘牛師たち、郵便局員たちが歩いてくるのだ。レヴォルヴァーを持つ者、猟銃をかつぐ者、庖丁を持つ者。老婆は熊手をかついで走ってゆく。

「やつらをやつつけろ！　やつつけろ！」

隣り村の百姓たちが、らばにのってやつてきた。なかには、撃銃銃をみせびらかしているのもいた。

「野豚どもを射つただよ。こんどは、將軍どもを射つとばしてくれらあ！」

みなから《クロボトキン》と呼ばれている古参アナキストはせわしくたちまわっている。

「どこに旗をたてるか？」

《クロボトキン》は、白い巻髪の手主で、蝶ネクタイをしめていた。

マノロがきいている。

「全員で何名なんだ？」

誰も返事をしない。子供が手留弾をほうりなげて、羊を殺してしまった。

《クロボトキン》は怒った。

「生命をあたやおろそかにすべきではない！」

「やくざども！　何名いるか、きいてるんだ！」

ギター弾きのアントニオがマノロのところへきた。

「鉄砲の射ち方を教えてくれ。さもないやあ、醜態だ！ろくなことにならねえ」

百姓たちはぶつくさいっている。

「どこにファシストのやつらがいるのか？ 教えてくれ。いまが射ち頃なんだ。やつらは、農園から打穀機をひっぱりだすぞ」

一行は前面に町をのぞむ赤茶けた岩場に位置している。草木一つも生えてない荒地だった。人間たちも、らばどももがなりたてている。だが誰も聞いてはいない。

マノロは登ってゆく。

「やつらをやつつけろ！」

らばどもは用心深く断崖を歩く。ピュッという唸り、轟音、赤茶けた砂ぼこり、砲弾の炸裂だ。みなわれがちにおりだした。マノロはさげんだ。

「とまれっ！」

残っていたのは、旗を持った《クロボトキン》だけだった。

「とまれっ！」

アントニオが殺された。彼は腹部をえぐられ、バラ色の朝の太陽をあびて横たわっていた。アントニオは、陽気なギター弾きで、バルセロナのパラレル街の誇りだったのだ。

「アントニオ！」

マノロがアントニオに呼びかけているのだ。と、不意に彼

は野獣のようになって、逃亡者たちを追って、突進する。

「アントニオが……。おい、やくざども、アントニオがやられたんだぞ！……」

彼らはたちどまり、ぼう然としてたがいに顔を見交わしている。撃銃銃を持った百姓が、もぐもぐいった。

「どっから射ちやがるか、わからねえ。だもんで……」

砲弾がもう一発炸裂した。こんどは誰もびくともしなかった。

マノロは登ってゆく。ほかの者たちも彼に続く。機関銃。

女が金切声を発した。らばが一頭すべり落ちた。兵士がとび

はね、ひっくりかえった。

「やつらをやつつけろ！ やっちまえ！」

ファシストたちの機関銃は鐘楼にある。倒れる者たち、這ってゆく新手の者たち。「やつつけろ！」という背後からの叫び。

マノロは急な岩をよじ登ってゆく。と、突然、彼はファシストを見とめた。彼は喜びの叫びを発した。

一行は、長いことほこりの中をころげまわっていた。その後、マノロは起きあがり、膝のほこりをはらってから、入念にウインチェスター銃を点検した。

「射てっ！」

彼らは町に突入した。なきわめくらばども、ガラスのわれ

る音、喜びと恐怖でひきつったような笑い方をしている年とつた女、黄色い歯をむきだして死んでいるろば。

ロベス大佐は懺悔室で発見された。老人が斧で殺したのだつた。

《クロボトキン》は鐘楼に登り、赤と黒の大きな旗をぶらさげた。

あいかわらず意地悪い笑いを浮かべながら、聖母は教会の入口に横たわっていた。激怒した百姓たちは、彼女の厚いピロードの服をさいていた。近衛兵の三角帽、ベレー帽、神学生の円帽、翼をおりとられた天使像……。

ヴァスケスの細君は《クロボトキン》にそつと金をにぎらせた。

「おたすけ下さい！」

《クロボトキン》は姿勢をただし、しろい巻髪をかきあげた。

「働かなければなりません！ シャツをぬい下さい！ じゃがいもをうえなさい！」

舗装の上を札ビラが舞ってゆく。子供たちがそれをひろい集めている。

「燃しなさい！ けがらわしいものを燃しなさい！」

広場には焚き火。ケルビム像だの、木製の花冠だの、ばらなどが燃えている。《クロボトキン》は札ビラを火になげこ

んだ。

「擄取を永久に葬り去ろう！」

涙が、くたびれたほこりだらけの両頬をつたって流れた。死者たちは、きのう楽隊が演奏場として使ったあずまやにおかれてあった。アントニオの胸には、ギターが……。娘が二人、儀杖歩哨に立っている。浅黒い顔をした若者がやつてきた。

「美人さん、食券はどこでくれるんだい？」

彼は行つてしまった。と、娘の一人がこういつた。

「夜、もし戦闘が起こらなかつたら、あたし、キスしに行くわ……」

もう一人の娘は、いやな顔をして、「あたしはまっぴらよ！」とやりかえした。

小さな娘っ子が、部屋着姿の奥様をひっぱつてきた。

「女ファシストなの。この人、あたいのほったぶつたのよ……」

奥様は、びくびくして、両手で顔をおおっていた。紫色にみがきあげられた爪が、日光をうけてきらきらしている。

「わたくし、ファシストではありません。神経がたかぶつていたんです」

薬屋のホセは、梵妻をどなりつけていた。

「てめえの聖餐なんざあ、いまじゃあ、屁とも思わねえぞ！」

広場から、《クロボトキン》の甲高い声が聞こえてきた。

「燃やせ！」

百姓たちは、《商業クラブ》の皮張り安楽椅子に長々とねそべっていた。彼らは考えぶかげにほほえんでいる。彫像、シャンデリヤ、花びん……。不意に、一人がたちあがった。

「でかけようぜ！ やつらは、打穀機をひっぱりだしちまうぞ……」

年寄の鐘撞き人が、齒のない口に笑いを浮かべながら、マノロのところへやってきて、たずねた。

「どこで登録すりゃあいいかね？ ファシストどもをやっつけてえんだ」

太陽はすでに高く登っていた。マノロは、ひどいのどのかわきに苦しめられていた。彼は皮袋をとりだし、口をひらいた。なまぬるいぶどう酒の、ごくわずかな流れ……。

彼は長いこと町の中を歩きまわっていた。市場では、メロンだの、サラダだのが売られていた。彼は徒弟学校へたちよった。そこにはファシストたちに銃殺された人々の死体が横たわっていたのだ。僧侶ミグエルは、地下室で見つかった。彼は、円い頭と首との区別がつかない程でぶっついていて、ぼろぼろの黒袈裟をはおっていた。彼はゆううつそうに毛むくじ

やらな裸の胸を搔いていた。彼はマノロのところに連行されてきた。両者はおしだまっていた。マノロは製本工の息子を見ていた。大きな青ばえが、子供っぽいうなじにたかっていた。マノロは信頼した口のききっぷりをした。

「おそろしいことだ！」

「いわく、《死は、われわれを、羊のように放牧している……》……」

僧ミグエルは、いつもの癖で、両手をこすっていた。マノロは、どうにもやりきれないような気持におそわれた。彼はたずねた。

「つまり、死にたいんだな？」

僧ミグエルは、そそくさと答えた。

「何にもならんよ。どうせ、あなたがたは、わたしを……、彼らは、あなたがたをやるんだから。誰が一体保証して……」

ミグエルはいいおえなかった。マノロが射殺したからだ。

マノロは赤い舗石を見ている。《でぶめ！ なんて血が多いいんだい！》

「トラックをなぜ見捨てたんだ？」

「いや、心配ご無用さ！ 車はうんとあるんだから」

マノロは、腹立ちまぎれにべつと唾をはいて、トラックの下に潜りこんだ。彼は、たっぶり一時間作業にくわれてしまった。

「できたぞ！」

マノロは袖で顔をふいた。と、ほこりが、油とまざりあつて、まるで粘土のように、べとついた。

「おれは、六年も《イスバノ・スイサ工場》にいたんだぜ。どんな細かい部品だって、知つてらあ。《心配ご無用！》とは、どういいういぐさだい……」

2 ベルナルはスペインへゆく

上の方で、八月のなまあたたかい雨がふつていた。タクシ―が空色の広場をぐるぐるまわっていた。人形だの、真珠だの、ぶどうの大きな房などが、ぬれた窓ガラス越しに、ちらついていた。停車場は地下にあった。そこは、はじめじていて、息苦しかった。ベルナルは、やっと客車の方へ通りぬけていった。誰かが大声でいった。《休養してこいよ！》……。ベルナルは思ひだした。《なるほどな、いまはヴァカンスなんだ》……。彼は霧にかすんだポスターの中に斑点を見とめた。それは、ブルーのトリコットを着た娘、砂、白帆だった。何と大勢の人たちだ！だが、ベルナルを見送つてくれる人は誰もいない。

彼は窓をのぞいた。あらゆるものがゆれはじめた。プラットフォームにいた一人の婦人が、拳をつきあげた。列車は勢

いよく地上へでた。雨……。

二、三日前だったか、ソーニエはベルナルにいった。

「君は、むこうで何をやるのかい？ ポスターの仕事でも？」
ベルナルは、笑ひだした。

「ポスターだなんてとんでもない？ 歩兵になるんだ」

集会在、例のきつかけだった。演説者たちは、いつも通り、声高く流調にやつてのけた。その後、スペインの老人が登壇した。その話しつぷりは、支離滅裂だった。彼は、苦しうにとちつたり、水を飲んだりしていた。

「ハエンでは、同志が殺害された……、そこで、彼の細君が入隊したんだ……」

拍手がおこった。スペイン人は、悲しげに、近眼をしばたいていた。

その時だった。ベルナルは、ジェルマンにいった。

「わたしはゆく」

彼は、タバコのもうもうとけむる、小さな部屋の中で、長いこと彼女に説明していた。《じつと腕組みしているわけにはいかないんだ。わたしは、機関銃隊にいたことがあるし、健康だし……》。ちよつと言葉をきつてから、彼はぶりぶりとしていいだした。《どっちみち、わたしは行く》

ベルナルは出発の前日になって、突然、画架にかかつて